

平成 21 年 5 月 28 日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2005～2008
課題番号：17320041
研究課題名（和文） 地方諸藩の能楽資料に基づく、都市と能楽の関係についての総合的研究
研究課題名（英文） A comprehensive study of Noh as a part of urban culture: based on a survey of documents kept by feudal domains in the Edo period
研究代表者
山中 玲子（YAMANAKA REIKO）
法政大学・能楽研究所・教授
研究者番号：60240058

研究成果の概要：

4年間の全国的な調査により、従来知られていなかった資料を含む多くの能楽関係資料の伝存を確認し得た。これらの資料から収集した能楽関係記事を比較分析することで、諸藩の能楽が従来知られていた以上に多様な担い手によって支えられていたこと、お抱え役者に対する藩の全面的な管理とサポートの様態、藩の所有する能面・能装束の管理の実態など、江戸時代の能楽の具体的な姿を明らかにし、今後の能楽史研究を大きく進める基盤を築くことができた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	3,400,000	0	3,400,000
2006年度	2,700,000	0	2,700,000
2007年度	2,500,000	750,000	3,250,000
2008年度	2,100,000	630,000	2,730,000
年度			
総計	10,700,000	1,380,000	12,080,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：江戸時代、能、狂言、藩猿楽

1. 研究開始当初の背景

本研究は、平成 11～14 年度に科学研究費補助金の交付を受けた研究課題「中世から近世・近代にいたる都市と能楽の関係についての総合的研究」の成果を踏まえて計画されたものである。11～14 年の研究により、江戸時代には大都市のみならず地方の小都市にも能が浸透し、小規模の藩でもそれなりに能楽への取り組みが行われていたこと、地方在住役者のネットワークの存在、大名の家臣や町人（いわゆる素人）が江戸の役者に師事して技芸を伝授されている事例などが明らかになっていった。だが 4 年間で調査し得た範囲は

限られており、膨大な藩政資料の存在は判っていても調査に到らなかったケースや、資料の有無自体を確認しきれていない地方などもあった。そこで、能楽研究所を中心に密接な協力の可能な研究者を中心に、大学院生及びオーバードクターを研究協力者とし、今回は時代を江戸時代に限定し、特に藩政資料に注目して研究を進めることをめざした。

2. 研究の目的

能楽が現代にいたるまでの間に、全国各地でどのように成長・発展したかを、具体的な資料に基づいて明らかにすることが、本研究

の目的である。特に、江戸時代を通しての、地方と中央との関わりに注目し、地方能楽史の体系的な位置づけを行うため、全国の地方諸藩の能楽資料を収集する。具体的には、各藩の藩政日記中に見られる演能記事や、各地に残る演出資料等を写真撮影により収集・翻刻し、データベース化する作業が中心となる。各地の演能状況、役者の移動・交流や中央との関わり、技法・習事の伝播等に目を配りつつ、地域文化史研究の一部として考察・解明する。

3. 研究の方法

(1) 情報・資料の収集

江戸時代、能楽は「式楽」として藩政の一部に組み込まれていたため、諸藩における能楽資料も、旧大名家の藩政資料と一体の形で伝えられている。その藩政資料の多くは現在、各地方の公共図書館や文書館に所蔵されており、目録によってその概要を窺うことが出来るが、能楽に関する記事は藩政日記や藩士の家譜などに散在しているため、従来、研究に活用することが困難であった。そこで今回、目録などを頼りに、能楽記事を含む藩政資料がどの程度残されているかを確認するため、研究分担者と協力して、全国各地の図書館・文書館を訪ね、情報の収集にあたった。その結果、弘前藩・佐竹藩・津山松平藩・臼杵藩などの藩政資料中に、まとまった能楽関係記事が含まれることが判明し、そのうち、弘前藩、秋田の佐竹藩を中心とする幾つかの藩について、更に調査を進めることにした。

藩政資料はその分量が大部であるため、そこから能楽関係記事を探し出すことは容易ではない。本研究で最も時間と労力を費やしたのもこの点であり、弘前では三千冊を超える藩政日記『弘前藩庁日記』（弘前市立図書館蔵）の全冊に目を通し、そこから能楽関係記事を抜き出す作業を行い、また秋田では藩に提出された膨大な数の藩士の家譜の中から能役者の分を抽出するとともに、藩士の日記類に見える能楽関係記事の収集に努め、電子複写・写真撮影を行った。これらの作業には、多くの研究協力者の助力を得た。

(2) 資料の翻刻・分析

こうして収集された資料を研究に活用するため、主に『弘前藩庁日記』の江戸日記について、研究分担者・協力者との共同により、資料の翻刻とデータ入力を行った。これらのデータや上記収集資料をもとに、弘前藩・佐竹藩における演能の実態を出来る限り克明に明らかにすることに努め、さらにそこで明らかになった事例を、他藩の例と比較することによって、江戸時代における地方諸藩の能の姿を多角的に分析した。

4. 研究成果

(1) 各地方に伝存する能楽資料の概要
四年度にわたる全国的な調査により、従来知られていなかった資料を含む、多くの能楽関係資料が各地に伝存することが明らかになった。その概要は以下の通りである。

① 弘前藩の能楽資料

津軽地方の外様の小藩である弘前藩では、江戸前期以来、十数名の能役者が抱えられ、盛んに演能が行われていた。寛文以降の『弘前藩庁日記』には、多くの能楽関係記事が書き留められており、その記事の一部は、すでに『津軽史』などに翻刻・紹介されている。しかしながら、従来紹介された記事は、江戸前期のものに限られており、江戸中・後期の記事についてはまったく調査がなされていなかった。今回、『弘前藩庁日記』全冊の調査を行った結果、江戸期を通じて、詳細な能楽関係記事があることが判明し、これによって弘前藩の能楽の歩みを克明に辿ることが出来るようになった。また、それを補う資料として、文化年間の弘前藩での能の番組帳、藩主の能の稽古に関する資料などの存在が明らかになった。

② 秋田佐竹藩の能楽資料

秋田佐竹藩の能楽については、『秋田県能楽謡曲史』や『秋田市史』に簡単な記述が見える程度で、本格的な研究はまだ手つかずの状況にある。今回、秋田県立公文書館に所蔵される佐竹家文庫の資料を調査し、佐竹藩の能楽史に関する基本的な資料を多く収集することが出来た。その一つは、藩士から提出された膨大な数の由緒書で、その中にシテ方の深見、狂言方の吉田（大倉）をはじめとする十二の能役者の家譜が含まれることが判明した。佐竹家文庫には、弘前藩におけるようなまとまった藩政日記は残されていないが、家老や藩士の日記、『国典類抄』などの編纂資料の中にも、佐竹藩の演能記録がいくつか見え、これらの資料についても網羅的な収集を行うことが出来た。

③ 津山藩の能楽資料

中国地方の親藩である津山藩の能楽については、これまでまったく研究がなされていない。しかし、今回の調査で、津山郷土博物館蔵の津山藩の藩政日記に、能楽関係記事が少なからず含まれていることが判明した。今回調査できたのは、寛文から正徳年間までの分であり、いまだ調査途中の段階であるが、藩主や藩士、坊主衆を中心とする人々が中心となって演能が盛んに行われていた様子を知ることが出来た。また、藩主が自らの稽古のために書き記した型付などの調査もあわせて行った。

④ 白杵藩の能楽資料

豊後の白杵藩の能楽史についても先行研究は皆無であるが、法政大学鴻山文庫、国立能楽堂に所蔵される寛文～元禄期の能番組が白杵藩のものと思われることから、今回新たに調査を行うことにした。その結果、白杵市立図書館に所蔵される白杵藩の藩政日記に演能記録がいくつか見えること、二代藩主稲葉典通が下間少進や中村靱負に師事して金春流の能を学んでいたこと、また少進関係の能伝書が所蔵されていることなどが判明した。

⑤ 人吉藩の能楽資料

肥後の人吉藩の藩主だった相良家は、室町時代から能役者を抱えて人吉や八代で演能を行っていたことが知られているが、江戸時代の能楽への取り組みについては不明な点が多かった。今回の調査で、熊本県立図書館所蔵相良文書に、人吉藩の歴代藩主が江戸で能を稽古した際のものと思われる書付類や型付などが所蔵されていることが判明したので、それらの写真撮影を行った。各資料の内容を分析することにより、人吉藩の能楽への取り組みの概要を把握することが出来た。

⑥ 佐土原藩の能楽資料

日向の佐土原藩は鹿児島藩の支藩的な立場にあるため、小藩ながら能楽への取り組みを行っていた。佐土原藩の藩政日記である『佐土原藩嶋津家日記』は、佐土原日記と江戸日記の一部が活字化されており、これらの記事からある程度は能楽への取り組みを知ることが可能だった。今回の調査では藩政日記の活字化されていない部分を閲覧し、藩主の初入部の際に行われる「三日御能」の具体的な様子や、能楽を担当した藩士の具体的な活動に関する記事などを収集することが出来た。

⑦ 琉球の能楽資料

琉球が公式に「琉球藩」と呼ばれるようになったのは明治五年のことであり、江戸時代は独立国であった。ただし、薩摩藩や江戸幕府との関わりの中で能（主に謡や囃子）が伝わった最南端の地である。従来ほとんど注目されてこなかった地域であるが、地方諸藩の能楽研究と関わらせながら、考えていくべき対象であり、今回主に二つの面から調査を行った。一つは能楽資料の伝存状況の確認であり、琉球大学附属図書館宮良殿内文庫蔵の謡本などの原本調査を実施した。もう一つは、能が琉球へ伝播した経路の確認であり、「家譜」をもとに、琉球の人がどのように能の稽古をしたのかを調査した。

⑧ その他の能楽資料

その他の諸藩については、越後長岡藩、越後村上藩、笠間藩などの藩政資料の調査を行い、能楽記事を含む藩日記や能役者の家譜の伝存が明らかになった。

(2) 諸藩の能楽資料から窺われる江戸時代の能楽の姿

こうして収集された諸藩の能楽資料は膨大な数に上るが、これらを比較分析することで、江戸時代の能楽はきわめて具体的な姿で把握することが出来るようになった。

第一に、諸藩の能楽がきわめて多様な担い手によって支えられていたという点である。従来、江戸時代の能楽史研究は、藩お抱え役者の動向に注目するものが多かったが、実際には、専門のお抱え役者だけでなく、藩主のお側に仕える小姓、あるいは配膳の用意をする坊主衆が、藩の演能に深く関わっており、彼らの存在抜きに、藩の能楽が成り立たなかった様相が明らかになった。弘前藩では、坊主衆のうち、六名を定員とする狂言方坊主という役職を定め、三名は大蔵流、残り三名は驚流の狂言を稽古するというように、芸の伝承のための確固たる体制が整備されていた。小姓や坊主衆が演能に関わっていた例は、佐竹藩や津山藩においても確認でき、その他の諸藩においても、同様であったらしい。

第二に、お抱え役者に対する習事伝授や能道具の支給が、藩によって厳格に管理されていたという点。弘前藩の藩政日記には、お抱え役者から藩に提出された休暇願や習事伝授願などが逐一書き留められており、藩によるお抱え役者管理の実態が克明に明らかになるが、なかでも注目されるのが、習事伝授や能道具の支給に関する記事で、伝授にあたっては、藩が伝授料を支給したこと、その際には、伝授者のみならず、家元にも謝礼が支払われたこと、伝授のための交通費・滞在費も役者からの願い出によって藩が支出したこと、日頃の演能に用いられる足袋についても藩が支給したこと、など、藩が全面的に彼らの演能活動をサポートしていた様子が具体的に明らかになった。これらの記事はまた、能の家元制がどのように確立していったのかを知る上でも大いに参考となるもので、今後の江戸時代の総合的な能楽史研究にも資するところが少なくない。

第三に、諸藩における能道具管理の実態が、これらの藩政資料から具体的に窺われる点。江戸時代、諸藩はそれぞれ、能面や能装束などの能道具を自ら保有し、専門の役職を置いて、これを管理していた。今回調査を行った複数の藩の資料によると、各藩では、能道具帳が作成され、定期的に虫干しが行われたほか、お抱え役者による点検も定期的に行われ、

維持・管理がなされていたことが明らかになった。藩が所蔵したこれらの能面・装束は、現在そのほとんどが散逸してしまっているが、藩で作成された能道具帳を頼りに、現在各所に散在する能面・装束が、かつてどの藩の所有であったかを復元することは、ある程度可能であり、今後、この方面の研究にも大きな成果が期待される。

このように、藩政資料を活用することで、江戸時代の能楽史は、具体的な資料の裏づけを得て、飛躍的に進展するものと思われる。今回の研究では、資料の収集に重きを置いたため、江戸時代能楽史の本格的な研究にはようやく着手した段階であり、今後なお分析が必要な点が少なくないが、最終年度には、その研究成果の一端を紹介するため、法政大学能楽研究所と芸能史研究会との共催の形で、「芸能史料としての藩政記録」と題するシンポジウムを開催し、主に弘前藩庁日記の能楽資料としての有用性について様々な角度から検討を行った。その概要については、近く論文として公表する予定である。

また、都市と能楽というテーマに関わって、江戸時代の演能の実態を示す恰好の資料である弘化五年の宝生大夫勸進能絵巻の全巻をウェブ上に画像としてアップした。そこに本研究の成果も順次アップすることを計画中であり、すでに大部分翻刻済みの弘前藩庁日記（江戸日記）の能楽関係記事についても、全体の翻刻終了後、ウェブ上で、あるいは活字によって、広く公開することを予定している。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

- ①橋本朝生、「大蔵清虎上演年譜考」、『能楽研究』33号、1～30頁、2009年、査読無
- ②表きよし、「江戸時代の能楽」、『能と狂言』7号、14～21頁、2009年、査読無
- ③伊海孝充、「能役者の足もと（四）」、『金春月報』29号、8～10頁、2008年、査読無
- ④宮本圭造、「続・江戸時代能楽繁盛記（十）」、『観世』75巻10号、48～55頁、2008年、査読無
- ⑤山中玲子、「能（求塚）の虚構」、『文学』8巻1号、145～156頁、2007年、査読無
- ⑥橋本朝生、「大蔵虎明上演年譜考」、『能楽研究』31号、51～105頁、2007年、査読無

〔学会発表〕（計 3 件）

- ①宮本圭造、「藩政記録から分かること、分からないこと」、芸能史研究会、2008年12月6日、法政大学

②表きよし、「近世の人びとと能楽」、能楽学会、2008年5月18日、早稲田大学

③山中玲子、「伝統と同時代性—能楽研究の国際化は可能か」、法政大学国際日本学研究所センター・法政大学国際日本学研究所・コレージュ・ド・フランス日本学高等研究所、2005年12月2日、パリ日本文化会館

〔図書〕（計 1 件）

①横道万里雄、山中玲子、松本雍、『能を面白く見せる工夫』、檜書店、245頁、2009年

〔その他〕

ホームページ等

<http://slurl.com/secondlife/HOSEI%20RESEARCH%20CENTER/250/52/23>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山中 玲子 (YAMANAKA REIKO)

法政大学・能楽研究所・教授

研究者番号：60240058

(2) 研究分担者

西野 春雄 (NISHINO HARUO)

法政大学・能楽研究所・教授

研究者番号：80061216

伊海 孝充 (IKAI TAKAMITSU)

法政大学大学院・人文科学研究科・兼任講師

研究者番号：30409354

宮本 圭造 (MIYAMOTO KEIZO)

大阪学院大学・国際学部・准教授

研究者番号：70360253

小秋元 段 (KOAKIMOTO DAN) (2005年度～2007年度)

法政大学・文学部・准教授

研究者番号：30281554

橋本 朝生 (HASHIMOTO ASAO) (2005年度～2007年度)

山梨大学・教育人間科学部・教授

研究者番号：30091838

表 きよし (OMOTE KIYOSHI) (2005年度～2007年度)

国士舘大学・21世紀アジア学部・教授

研究者番号：30214224

竹本 幹夫 (TAKEMOTO MIKIO) (2005年度～2007年度)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：90138181

(3) 連携研究者

小秋元 段 (KOAKIMOTO DAN) (2008年度)

法政大学・文学部・准教授

研究者番号：30281554

橋本 朝生 (HASHIMOTO ASAO) (2008 年度)
山梨大学・教育人間科学部・教授
研究者番号：30091838
表 きよし (OMOTE KIYOSHI) (2008 年度)
国土舘大学・21世紀アジア学部・教授
研究者番号：30214224
竹本 幹夫 (TAKEMOTO MIKIO) (2008 年度)
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：90138181